

2012年12月26日

【 津田塾 】 大学に対する評価結果

相互評価委員 東京女子大学 数理科学科 大山淑之

【総 評】

2008年の大学設置基準の改正、2007年の大学院設置基準の改正により、大学は授業の内容及び方法の改善を図るため、大学院は授業、研究指導の内容及び方法の改善を図るため、組織的な研修及び、研究を実施することとなった。各大学は実質的にFD活動に取り組まなければならない。

貴大学において、各々の組織で行われているFD活動を組織的に統括するためにも、FD委員会設置、規程の整備は早急に行なわれるべきであると考えます。

また、FD活動の意義、目的について、各教員へ周知され理解されるように、施策を講じることが必要である。

現時点で、FD委員会は設置されていないが、個々の組織では、様々な取組がなされている。英語教育におけるPACEの導入、国際関係学科のカリキュラム改正、履修登録単位数の上限の設定、クラスアシスタントの導入、文学研究科修士課程における英語教育研究コースの開設、理学研究科における情報科学専攻の設置などが過去3年間で行われた。

また、2004年度からFD支援のための教育研究支援費が措置されており、評価に値する。

1. FD活動の目的

(所見)

FD活動の目的は、学部は学部学則に、大学院は大学院学則に定められている。各教員への周知が必要である。

2. FD活動を担っている組織

(所見)

学部全体のFD活動の取り組みは教務委員会が担っている。大学院においては、各研究科に関わることは研究科委員会が、大学院全体に関しては大学院委員会がFD活動の取り組みを行っている。事務組織として、教務課に設置された研究支援室がFDに関する業務を担当している。また、各学科や共通科目委員会等の既存組織が、それぞれの分野に関することに取り組み、授業内容・方法等の改善を行っている。

(努力課題)

各々の組織がFD活動に取り組んでいるようであるが、大学全体のFDを統括する組織が必

要であると考えられる。

3. FD活動の具体的状況

(所見)

シラバスが全科目について作成され、ホームページから随時閲覧できるようになっているが、授業計画に関して、科目によって記載内容に精粗がある。記載内容を徹底するとともに、シラバスと履修要覧の機能を見直すとしている。シラバスの内容の充実は重要である。

英語教育における PACE の導入、国際関係学科のカリキュラム改正、履修登録単位数の上限の設定、クラスアシスタントの導入、文学研究科修士課程における英語教育研究コースの開設、理学研究科における情報科学専攻の設置などが過去 3 年間で行われた。

各学科、研究科で、それぞれに授業内容、方法等の改善に取り組んでおり、いくつかの取り組みが成果をあげている。

2012 年 9 月 12 日の意見交換会においては、以下の点が確認できた。

語学科目では、コーディネーターがシラバスを含む授業内容のガイドラインの見直し、学期中に起こる授業内容や出欠の問題など、様々な問題に対処している。

また、上記の文学研究科修士課程における英語教育研究コースは、大学院英文学専攻課程協議会にも単位互換科目の提供を行い、学生だけでなく、教員に対しても実践的な英語教育を行っている。報告書には記載されていないが、評価に値する活動と言える。

これらの活動は FD 活動に大変効果があると考えられるが、具体的にどのような効果があったのか、検証することが求められる。

「授業に関するアンケート」の活用に関しては、2012 年度の教務委員会で、活用方法、学生への結果公表の方法等の検証を行い、大学院においても、授業アンケートの実施等に関する検討を行うとしている。現在、「授業に関するアンケート」の結果は、担当者だけではなく、学科主任等に適宜配付されているが、結果の活用は各教員の裁量に任せられている。アンケートがどのように授業改善に生かされているか、検証することが求められる。

2004 年度から、FD 活動支援のための「教育研究支援費」(FD 支援費)が措置されている。措置を受けた教員は、翌年度に開催される全学公開での研修会で成果発表をおこなう。成果報告会では、活発な議論が行われている。積極的な FD 活動であると評価できる。

(優れている点)

英語教育に対する FD 活動は優れている。

FD 活動支援のため、FD 支援費を措置しており、その結果、新たな FD 活動に対する情

報が得られている。積極的な姿勢は評価できる。

(努力課題)

各 FD 活動の効果の検証を具体的に行うことが求められる。